天童句集

春之部

元朝や朝寝の耳よ笛太鼓

万歳の烏帽子きらめく初日哉

自轉車よ小弦えしまの日哉

紅梅のうしろに青し春の空

光ゆくり風ひかりつゝも鍬　露伴

特別
14
3159
A15(1)
早稲田大学図書館

14
3159
A150

吉野初瀬詣

花見にと出づる門迄の柳ぶ

[illegible]晩雪行きなやみた日傘ぶ

百歳の幸すぶ帆あり濃[illegible]舟

木更津に賀茂で濃うん汐干狩

春風に庇側町のキヤリかな

春雨や終日心あきたらず

春雨にうるほ海の面[illegible]

[illegible]や[illegible]の水[illegible]る氣ひくす

野を焼けばそれ程よりてまの雨

杖ありて門よ濃ふや雪解川

春雨やきのふ焼[illegible]地の跡

門ふうくさせる軒や梨の雨

門杉にさはり屋[illegible]ある晴着ぶ

[illegible]雨世[illegible]る攝政[illegible]事

をうぼきて

[illegible]梅[illegible]の御[illegible]

傘中人坐上人[illegible]り[illegible]者の雨

春風や[illegible]の池のさゝら浪

[illegible]や酒屋すみれん魚屋の桜
[illegible]や京前垂の新しき
[illegible]や芝居帰りの[illegible]
[illegible]や石の地蔵の笑ひ顔
春雨や濡れても大事無く思ふ
笠ずりし傘うるし春の雨
春雨や軒端もやうの煙
ぬかにちらと居眠り二度傾けつ
桜花家々とりどりの[illegible]か

[illegible]
桜花よりくるを日本は生れけり
春雨や濡れて少し傾のあるべし
春の手や隣はけふ
軒の通を猫へば其儘春の雨
桜花犯女[illegible]る花吹雪
桜花[illegible]の[illegible]
家々さや夕暮せまる桜花
[illegible]桜中家々とふ者は

結ちらし甲斐こそなけれ櫻花

さくかと見れば又ぢ散りにけり

[illegible]

[illegible]や輪のあるの薄こそ

[illegible]

[illegible]の砂利も光るや春の風

菜の花や死ちりぼふ幸の路

[illegible]

[illegible]

[illegible]れば櫻の[illegible]

菜の花や見渡すかぎり菜畑

待せぬ[illegible]の[illegible]

遊び事に菜摘みつゝ中の情

花見こゝ出る妹ながら若菜かな

去ぬ[illegible]つれ見んば[illegible]の桃

花盛り見そこなふに遅さくら

[illegible]チョウポリ[illegible]て[illegible]波山

梅さく都の花をたづねて

われハ旅路のなぐさ今日もそぞろの

菫さく野辺道に打ちぬる雑は

たゞふみやりし旅路あるうん

花の日に筆りてみれハちる花の

四ひら三ひら わゞ宮の入る

のちかゝる花のもとハ物もひきや

坊はゝ〜しもちる梅花

菫咲くけぶりに筆りし雑すれ

大り宮を拝ゝ〜のいのゝ行ゝ

しるしあてもの色ちらめに

青葉ゝ〜れほゝきん帰く

さくもおしさのぬもよや梅花

さけば心のあわゝ〜ば

満開の花氣味ちらし梅り見て

ゝの心花ゝうかれ一人

ちゝまうれ ほゝきなく

ひとりもて気仲の事

おそろしや

おとなくるつれるき人はいでもこずぜ

ひとりかへるのおとのみぞきく

沈雪や寒村の夜に降り重ける

降雪をふみちらしたる庭のあと

義人の丁稚我家の子人ぶ

義人の礼儀をうき紀子ぶ

正月三日ひのきさわ孫ぶ

廣の人ハ皆来相撲山至陳

何事ぞ彼之人の黒眼鏡

うの句ハ九月の比撃る投書採点

永機がみき硯と書ふ、お書

長戸そりア苔のうと記ち

竹のあの畑ハ朽ちる草鞋かな

角くある墓にいたく野羽

わが宮みは此の一陣ぞ福寿

梅の花咲けばぎく二月あくかき
霞みたる所のあるかと上野
の梅さき所ぞ清くさかりの春の夜かな
梅ひとえ梅ひらひらう梅の蕾の梅
是所の四隅是蕾表で梅ひらき
梅の枝よ葉も見えぬ野蕾蕾
かくまったやうに我てのひらなる
江戸の海
富士山や富士を背負うて夕干物
心朋はいつつふる来
ふてゆざくら

夏

葉桜の中に一本遅ざくら
近所の此所をちんどと治平物
いくつうに来て鶯けり初桜
櫻咲て塔も湧出くなり
待つは変きものにはあれと遅桜
山里は梅より奥ふる桜のれ
雪つもる心で来て初桜
寄すでもなるでもなしや梨の花
馬柵物よ数る山吹のへばりつく

菜畑に降りて来しなり散る櫻
水菜色の畑の畦　鄙俗　菜の花
台の内に春は来にけり松立てて
花咲いて歌仙に踊くなりにけり
飛鳥山にて
櫻だに吉野に限る事はかし
梅ちで枝に其後櫻ちる
六月頃蝶翅なしなりなる徒らに
一望は広　猫ひ　吉野山

七月　野芋　野芋が正月
ありてこりえ朝で福寿草
雑煮食ふすべすらなくて福寿草
福寿草　咲くのうたに軒上公
菜屋老　入れて確乎福寿草
福寿草　花坊西美
福寿草　黄色　咲くて生命なし
梅ちつて扱もその後に桃
陶然と酔うて梅に　ようこそこころ

和昔朝茶のうて忘れおし
ゆう昔の和言きゝつる
（九二、二、二六朝寒夢）

昔は數の梅は和言うし
梅園梅里と杉の森
花やゝて又梅園過まうおそうし
春風や里の小川ゆうつゝ
小橋の底ゆうゝとうつ

菜の花や木の根の苔や苔や日や
梅はゝて里色すまうる杉の森
春雨や新潟ゆう風呂の湯氣
春風や浜戸の小川のさゝら波
神ゆもとゲンゲタンポ、児ゆ三たり
ちの野つゆうの人なゆ

この頃をゝんで春毎の苦心

夏之部

軒ちはらくさみこらへて杜宇
又一か夜や鈎瓶の雷雨切らず
左傳よんで土にくりさき暑ぶ
菖蒲葺く軒に楚辭ゝむ男ぶ
水經を枕に夏の昼 除かれ
鄰國に夕立ふるし 暑さ忘
一夜に金谷爲田やほうきた

紫陽花に頬摺すれば我顔も大に
矮夜や水とりの足らぬ鶏の声
矮夜や暗夜あぐらの窓白し
矮夜や亟谷の関の鶏の声
初蝉や故郷の榎の木忍ばる
早ちりゥと元の所よ蜻蛉ふ
荷車のさゞらと牡丹つみて行く
大利根の向ふの岸や雲の峰
真菰刈る鋭鎌に怖ぢぬ性すれ

露晴れや箒の跡の地の臭ひ
筋の輪の末や雲の峰
うゆばゆや土の香高き庭掃除
夏渡や文の封切るかなしみ
夕風や藤蚊帳目に入る身の弱り
笹の葉の力ありともせず日照雪
石蕗を半ばいかくて篝かな
護国寺や蕗に青梅の落る音
青苔に花の花散るより菊寺

川筋は芦にかくれて行くこゝ
前鬼後鬼登りんと擬す雲の峰
船大工の鑿音涼しく行くこゝ
蟬の時雨 栗津の原の右左
夏川や草の中なる話声
虻の群の中に一本合歓の花
鼓弓花や静御前の墓の上
桔梗や終日きしる暑さかな
矢車の花や行くもゝ行くもゝ

一 きの帽子昼寝をなやましれ
みそ萩や和尚畑うつゝの壁り
分日も又きのふのやうな雲の峰
物荷すふ巡の左右やうつぼ艸
通し矢や射やうつぼ草
駆け出すもあり驟雨
月乙女のすゝ水は半はまき
堤原や湯の植えけぶるい右 楓
雷雲つる水田は雲の半苗

白雨は濁田を時雨て蟬鳴く
雲清京の遠山
小流るもまさかきて
板屋より
苔の岩ばや行て
行もせぬ
苔の雨田
日照雨降るや
驟雨やけしは
草の宮は
虹の跡
灌落て旅に
蝉なくや
子蔭
朝涼や後刻の
日照雨
雲

漂泊を笑さるみちのくや八十梅の病

あやめすき て夜明しを夏山の

雲さがはすも 繁昌しるの主

蓮とりひ 菊とのみふ 鮎に

わか葉屋の 牡丹見すぐやし

[illegible]

[illegible]上州のそら 野州の野

おもひは生果せざき 旅やゆく 秋の夜

[illegible]雲や 敵 国境に 攻めらるる

世親に 行きひらみて 晴天 釣り

[illegible]猫は 恋 [illegible] 晴天 釣り

雨雲よ 芭蕉の 影のあるうさぎ

太陽に 黒点 [illegible] 芭蕉 [illegible]

[illegible] 波間 [illegible]

[illegible] 朝の 送らや [illegible]

[illegible]

河貫の名のみのうつり　青々うれ
新うりてかうもあてくるる　郷人
夕立やぬれ合題の扇かくげ
板の間や鮎を焼く煙　蚊遣
河貫や小川の鮎を焼ふ　ミサゴ
山の宿　酒あり　鶯鄙
ひとり病む床よ見舞ふ蝸殿か
むせるなかれぬと示し書物か

寅
為

一生を仕舞し冥つ花にけり
海の寅の蕎麦をもてんば故郷思ばる
ほとゝぎす　を焼の火を冷しけり
○大石為佛が祖師は紙衣の白を撰
ものいはぬ雲隠で聞くほとゝぎす
神の子の新ら麦の新
雞を起しに来るる　ゆ鈴
社宇待ち五月の門をの鈴

聯

ゆうふとはせめず僕は ひとしきます

行きもせず逢ひもしまいた ひとりきまし

五月雨や饑餓の香す焼き仕舞ふ

月見草咲く附 搬攬の道へ寄れる

天晴と咲いて 傘さす 牡丹かな

厨裏酒無くして 客遠く来らず（昭和四 六、一七）

庭前花満ちて 蝶自ら去らず

彼方見ゆ此処よも淡くも 月見草

二条河原の葵祭の 土堤

山廻りみ何事もなく延びて 花や咲く

二本ずで咲ける七の蕾や冬

行水や簾よかこむ 湯のけむり

跡無くして 山ほととぎす 啼き啼かぬ

洗濯の盥に浮きし 桐の花

葛（くず）延び居をそめて 黒の子等

果ては又野蒜も交りて 草の令も

蟷螂なりしや二本出でやむ 暑さかな

さそうなや淀の里に脱[illegible]
[illegible]なすの高無のあるりやさみそ
[illegible]も長くはかも[illegible]
[illegible]て[illegible]や瓜茄子（ナスビ）
あり此[illegible]の長くかくまこの子
故郷や幼馴染のうつぼ舟
蚊帳出て[illegible]
[illegible]び朝顔[illegible]
武蔵野の[illegible]

秋之部

牛部屋に蚊のとまりする残暑かな
[illegible]渡根の彼面かくす蔦かな
[illegible]あるりや蹴上の茶屋の花野哉
[illegible]を咬ひ捨てある紫花か
[illegible]石[illegible]美菊の[illegible]
山萠のあるのらさまする地白か
鶏頭や探つて見さか種黒し

木犀や夕日あつるき御簾の外

唯一つ所に出でゝ稲刈る

田畑一面に鶉鳴くなる栗畑

わぎかふら八百屋ならぶ麹町

野分たちたゝもあし鳥瓜

蓮の實の殼に洗ひし硯哉

芭蕉

釣抜いて切株の白き北斗清水

学家の扉を叩けり桐一葉

流沙路尽き月見ゆ銀の河

青海に船をひゝせり天の河

淨めゝる書院の椽や桐一葉

二百十日何のへちまと結ぶふ

傘ひとり蓑笠四人秋の雨

こゝろなき人にはうきぞ萩の露

萩の露ちるとの事ぞ秋の風

[illegible]人の世[illegible]や[illegible]
萩の[illegible] 萩[illegible]下[illegible]
今[illegible]
百[illegible]や 枕を[illegible]て起きたる[illegible]
唐からしの朱を[illegible]茄子か
文[illegible]
[illegible]
市[illegible]

[illegible]月を[illegible]
[illegible]
鶏[illegible]や 瀬戸の[illegible] 柳[illegible]
[illegible]の人を送る[illegible]秋の[illegible]
戸の[illegible]問[illegible]百[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の牛[illegible]茅の輪か
一[illegible]踊り[illegible]

都より富貴さは 萩の餅うる数
四条の白い屋敷 豊かうり 竹付面
秋風よ 鈴虫たれむ 宮瀬まら
蔓虫の 期節は 秋か 鳴くからは
紫苑の 廣たしうみは 濡るる 莫蒼の
足弱は 苔 取る 海に 笑ひうみ
伯しでは 何つ 廣る 竹の 雷
蛙の 声 残るに 拾ひのな

世界のびて 秋の 秋さくへけや
青門 栗をちぢり 蔓 野分
雁の 声 きくに たけても 思ひます
うらのあすを なるあらしく
牡丹花の 牛もくぐれる 萩 輪ぐ
かこつ 雲 つくつ 廣ーと 秋の 堤
ふる 雲や 月は むこの 山の 端

木節や高地の里も稲刈花

蜻蛉を未だ追ふ山路かな

冬之部

庭掃い往来止めのみぞれかな

鐵鉢の米ふみ進る霰かな

炭つぐやふけゆく秋の陸の月

岸辺に棹く煙に出せば曇りかな

月見て白路をゆくる氷雨かな

早行の人馬息見ゆ松の霜

豆腐屋のはんぎり叩く霜かな

鬼貫の門素なるや鉢叩
鉢叩の瓢ひたばるあられかな
雪の次ノ日終日曇り空なりき
茶經嚙み茶園花盛んなり
炭ひさぐやふるき夜比叡かそへつゝ
加冬
ゆふぐれは籬の外をとゝさしたる
ゆふはしるさ黄菊白菊

炭竈のあるにうゑかぶらかな
定紋や炭を碎きけり
手洗のひしやくの柄や炭の屑
炭屋の走路人形の屋根
年たえ〳〵真間の継橋きて見れば
むかしなつかしの名ちりしく
かきたえしまゝのつきはみゝれハへて
つる寒ももれてむかへるうこと　蕉木集

白雪の降りやみぬみ社の
あなの面白き
四君子に水仙もれし　恨みぶ
水仙や白魚しらうをなりける　縁の先
炬燵して　鮒釣る舟の　寄りぶ
夜あらば　冥土の　孤　の　梅
いやなしば　忘れぬ　れし　梅風ぶ
其に　音信　なる　時雨ぶ

浦伝ひ
辰巳　船　一日　焼ぶ
梅　さらば　笠げん　と　いし　冬籠
笠洲
手の　文理　見せて　火鉢ぶ
この　あり　幅　敲　山　川　多
後寛の　後姿　やあ　ろ　ま
雨　て　兎の　白髪ぶ
蔦の　表も　裏や　七部の　雲

埃捨つる庵をなみする雪の朝
水の音も氷て筧ぞ情なき
雪降りて世の中黒く見えぬ哉
柳子を拾へて池の氷りかな
寒山も蕪を持て煤掃
富山も草を投げて煤掃
拾得は竹のもとの煤掃
元旦の大根洗ふ夕日かな
枯芒をくぐりつかぬ二羽

野辺あるかと庵を植てる野菊哉
小塔を数り地蔵の茶
見あるきぶ山一筋の両岸の枯芒の
穂はぬのぐとそよぶく
橋の糸はきぬ霜にうたれおされて
大和国は芋掘りけるを
枯芒や鳴る音小ぶ一羽宿
鶏ちりぬ雪ぬき雪ぬ雪

秋と

連や碎いてうつす比良の雪

ちるもみぢ荒れ行く秋の板庇

月の海うるむ袖はぬれ濡つゝ

笠ざしや枝で跳とる岩さくら

狂句

博奕で勝て和織の袴をメる　十二月の詩

えしだけは秘はいらぬと深呼吸　高田式深呼吸法行詩

角兵衛は両手のひらに豆をだし

藝無しが犬にオアヅケ教えて　居眠り　四月十六日

鹿ごといつぺん逃げ出す水彩画

最明寺生木の煙にむせびけり

義太か口をゆがめつゝ思はすらん　鈴

別るゝ恋

行つ所の花ばかりこそは
すさ別るゝこゝろの花なれかな

有りとしるしるはめ山陰
立つなり
細く幸せ体炭竈のゆむ
あれども炭焼行ずに
はなれ孤ぬるかぶ死ぬる
なり

はてなき旅
師を去りぬ　もの花のすゑ
さは秋の風　山ぶかきその国
千里を走る　黒い雲
飛ぶ鳥　笠ぬぎ　おのがうら
ながめて山の　青きすそ
絵を画りて　はるかなる
はてなき旅の　紅の色
故郷よりとる　芳き信
つゆ　雨の中　秋深　唐橋

雑

あり　ゆゑは我も　恋　き美人哉
雲
友　ゐてひとりしけばさびしく
あれ　酔ふ事　幸はずすむ
海原　一仏　静の鈴の音
魚　釣り　水に心引かれす
飛騨中山　七里

世に　あま雨の

冬ながくて秋をそえ赤井山在

かきつもとゝ大四郎つぎ

春十六丁四畦太郎七十町

夏麓丁四畦一反百二十畝

秋耕卅丁 7/1 4/2

冬越工春野 2 0 2 2

秋熙丁耕 2 2 0 1/1 秋早耕 9 4 7 1 1

秋足 綾成 春耕墨記 耕